

地域政策学部

学校推薦型選抜Ⅰ問題
(小論文)

2025年11月23日(日)

(9:30~11:00)

注 意 事 項

1. 試験開始の合図があるまで、問題冊子の中を見てはいけません。
2. 問題冊子は8ページ、解答用紙は2枚あります。
3. 解答用紙の受験番号欄は2ヵ所です。氏名を書いてはいけません。
また、※印欄には何も記入してはいけません。
4. 解答には筆記用具、消しゴム以外のものを使用してはいけません。
5. 試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を挙げて試験監督者に知らせてください。
6. 問題冊子は持ち帰ってください。

問題 次の資料を読み、以下の設問に答えなさい。

資料 1

昨年の夏、あるシングルマザーの方から、こんなお話を聞いた。

息子が突然正座になって、泣きながら「サッカーがしたいです」と言ったんです。

それは、まだ小学生の一人息子が、幼いなりに自分の家庭の状況を理解し、ようやく口にできた願いだった。たった一人で悩んだ末、正座をして、涙を流しながら。私が本書で考えたい「体験格差」というテーマが、この場面に凝縮しているように思える。

私たちが暮らす日本社会には、様々なスポーツや文化的な活動、休日の旅行や楽しいアクティビティなど、子どもの成長に大きな影響を与え得る多種多様な「体験」を、「したいと思えば自由にできる(させてもらえる)子どもたち」と、「したいと思ってもできない(させてもらえない)子どもたち」がいる。そこには明らかに大きな「格差」がある。

その格差は、直接的には「生まれ」に、特に親の経済的な状況に関係している。年齢を重ねるにつれ、大人に近づくにつれ、低所得家庭の子どもたちは、してみたいと思ったこと、やってみたいと思ったことを、そのまままっすぐには言えなくなっていく。

私たちは、数多くの子どもたちが直面してきたこうした「体験」の格差について、どれほど真剣に考えてきたでしょうか。「サッカーがしたいです」と声をしぼり出す子どもたちの姿を、どれくらい想像し、理解し、対策を考え、実行してきたでしょうか。

私たち、日本社会で生きる大人たちの多くは、子どもたちにとっての「体験」の機会を、いまだ「必需品」だとは見なしていないのだろう。阿部氏の調査¹⁾では、泊まりの旅行、スポーツ、音楽活動への参加などについて、「あったほうがよいが、持てなくても、いたしかたがない」、「必要ではない」という回答が大多数を占めている。

もちろん日本でも、自分自身の子どもに対して様々な「体験」を与えたいと願い、

実際にその機会を与える親は数多く存在する。だが、それがあくまで個々の家庭ごとの話にとどまっている限り、裕福な家庭に生まれた子どもたちはともかく、低所得家庭の子どもたち、あるいはその他のハンディキャップを抱えている家庭の子どもたちは、誰からのサポートも得られずに置き去りにされるだろう。そして、実際に置き去りにされてきたのだ。

重要な分岐点は、この社会で生きる大人たちが、「私の子ども」だけではなく、「すべての子ども」に対して、「体験」の機会を届けようとするかどうかにある。「体験格差」をなくするという意思を、社会全体として持つかどうかにある。

そもそも、日本社会が「子どもの貧困」という課題に向き合い始めたこと自体、それほど昔の話ではない。「子どもの貧困対策法」が施行されたのは、ようやく2014年になってからのことだ。そこから今年でちょうど10年が経つが、社会の課題認識という意味でも、必要な対策が十分に立てられているかという意味でも、まだまだ道なかばだろう。

その中でも、「体験格差」への関心や取り組みは、特に不十分だと言える。

出典：今井悠介(2024)『体験格差』講談社，p 3-6 一部改変

注

- 1) 阿部彩氏は社会政策学者で『子どもの貧困』の著者。調査は2015年に日本の大人を対象に行ったもの。

資料 2

日ごろ、子どもにどのような体験をさせていますか？ いろんな体験をさせたくても、難しいこともあるかもしれません。最近「体験格差」の話題もたびたび耳にするようになりました。そこで体験が子どもの成長にどのように影響を与えるのか、子どもの学力や非認知能力に詳しい、お茶の水女子大学教授の浜野隆さんに聞きました。

——そもそも「体験」といっても幅広いですよ。

体験とは、その名のとおりに「自分が身をもって経験すること」(広辞苑)です。ただそれでは漠然としているので、ここでは子どもが「学校外」で行う活動のなかで、実際に体を使って自然や人・物などの対象物に関わっていく「直接体験」ということでお話ししますね。動画やゲーム、オンラインなど疑似的、間接的に関わる体験ではない、という意味です。

そしてこれらの体験は、子どもの学力や非認知能力にポジティブな影響を与えることが国立青少年教育振興機構の調査でわかっています。

——体験によって子どものどんな力が育まれるのでしょうか？

同調査によると、自然体験やお手伝いが多い子どもは「探究力」が身につけているということがわかりました。

——なぜさまざまな「体験」をしている子は「探究力」が高いのですか？

探究力とは、「自分で課題を見つけ、その解決方法を考えて情報を集めたり、分析したりして自分の考えをまとめていく力」です。現在の小中高校では「総合的な学習の時間」や「〇〇探究」といった時間が設けられていて、探究力を育む活動が重視されています。これは、探究学習が学習指導要領で述べられている「学びに向かう力」や「思考力、判断力、表現力」を育むと考えられているからです。

たくさん体験をしている子は「体験の幅が広い」ので、自分の体験をもとにした意見や推論を言いやすく、さまざまな視点からアプローチしようとするので、学習意欲も高くなりやすいといえます。結果として学力が高まることにもつながるでしょう。

——ほかにも身につく力はありますか？

国立青少年教育振興機構の調査では、体験を多く行っている子どもほど、人に対する思いやりや協調性、さらには積極性や自己肯定感が高い傾向があることもわかっています。

体験の多い子は成功体験だけでなく、失敗体験も多いもの。失敗したり、やる気

をなくしたりといった経験がある子は、他人がそのような状況になったときのつらい気持ちに共感できたり、応援しようとする気持ちを持ちやすいということです。失敗や困った経験を乗り越えて「がんばろう」と気持ちを切り替えられることにもつながるのではないのでしょうか。

——体験が多い子のほうが学力も高い傾向があるのでしょうか？

国立青少年教育振興機構の調査では体験の多い子は、勉強に対する自信も大きいという結果も出ています。「勉強が得意なほうだ」と思うということは学力に対する自信を持っているので、ある程度の学力も伴っていると考えられます。文部科学省の調査では、自然の中で遊んだことや自然観察をしたことがある子どもほど、理科の学力が高いという傾向が見られました。

裏を返せば、机に向かって勉強すること「だけ」が学力や自信につながるわけではないともいえます。自然体験から学ぶのは知識だけでなく、失敗したときや困ったときに原因を考えたり、工夫して解決したり、乗り越えようとする力です。これらの力は、学業の達成だけでなく人間的に成長していく礎にもなります。

このように体験が多いと、

- ・ 学びに対する意欲や人間関係を良好に保つ意識、自尊感情といった「非認知能力」が育まれる機会が多くなる
- ・ 自分の興味や強みを発見しやすくなる
- ・ 他者との協力やコミュニケーションを通じて、社会性が身につけやすくなる
- ・ 成功体験や失敗体験から、自分を客観的に見つめる（メタ認知）力のスキルが向上する
- ・ 体験から得られた知識やスキルが、学校での学習にも直接役立つ

といったよい影響をもたらします。

——子どもの体験の多い・少ないに差が出る「体験格差」があるとも最近言われています。

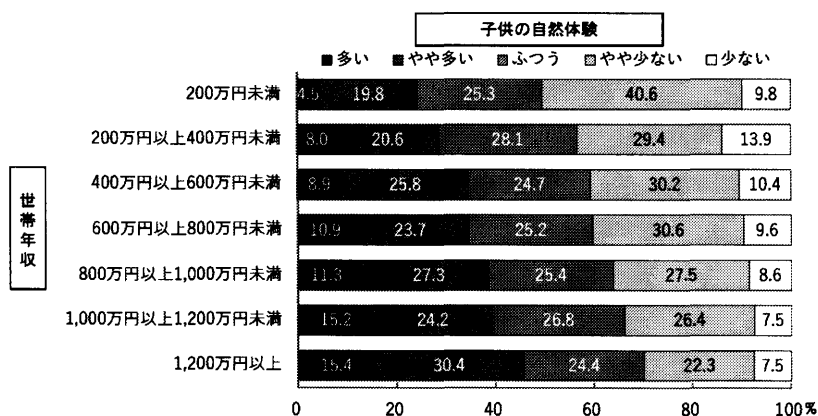
「体験格差」というのは「子どもが選ぶことができない条件」によって体験の機会に差が生まれることをいいます。その条件というのは「性別」「親の収入や学歴」「住ん

でいるところ]などがあげられます。

これらは残念ながら子ども自身の努力では変えることができません。例えば、「地方に住んでいるので、都心にある博物館や美術館にはなかなか行けない」「子どもは中学校で運動部(例えば野球部)に入りたいと言っているが、ユニホームや活動費にとってもお金がかかるので、家庭の経済状況では難しい」といった状況が考えられます。

実際に「親の世帯年収が高いほど子どもの自然体験は多い」というデータもあります。キャンプや自然体験イベントの参加にはお金がかかるという事情が反映されているのかもしれませんが。

世帯年収ごとの子供の自然体験(小4～小6)



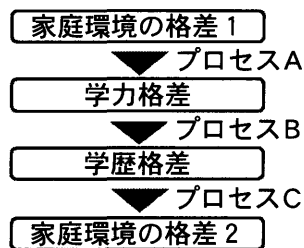
出所：国立青少年教育振興機構(2021)『青少年の体験活動等に関する意識調査(令和元年度調査)～心身の諸側面，社会経済的背景との関係～』，p7

出典：AERA with Kids+「体験が多いほうが子どもの『学力』や『自己肯定感』は上がる？ 学力調査に詳しい専門家に聞く“研究結果”とは」 2024年12月18日 <https://dot.asahi.com/aerakids/articles/-/243479> 一部改変

資料 3

格差化の問題を改めて定式化すると、次のように言うことができる。すなわち、「家庭環境の格差が学力の格差につながり、さらに学歴の格差を生み出している。その結果として、最初にあった家庭環境の格差が拡大再生産していくことになる。」図示すると、次のようになる。

図に示された格差化のプロセスは、3つの矢印(▼)が合成されたものだと分析的に捉えることができる。「プロセス A」とは、「家庭環境の格差が子どもたちの間の学力格差につながるプロセス」を、「プロセス B」とは、「学力の格差が学歴の格差を生み出すプロセス」を、そして「プロセス C」とは、「人々の中の学歴格差がさらなる家庭環境の格差を導くプロセス」を意味し、それらが組み合わさって教育格差の世代間再生産の構造を成り立たせることになる。



出典：志水宏吉(2022)『ペアレントクラシー「親格差時代」の衝撃』朝日新聞出版，
p 172-173 一部改変

資料 4

So, here's a concrete proposal to further this idea of dignity and mutual recognition. One of the most corrosive effects of the widening inequalities of recent decades is that those who are affluent and those of modest means increasingly live separate lives. We send our children to different schools, as we've discussed, but we also live and work and shop and play in different places. The affluent secede from municipal centers and go to private health clubs. There are fewer and fewer class-mixing institutions in civil society, fewer and fewer occasions when rich and poor encounter one another in the ordinary course of their lives. We need to build a civic infrastructure for a shared life where people

encounter one another, whether in health clinics or in public transportation or in public parks and recreation areas, municipal facilities, public libraries, sports stadia even. This inadvertent class mixing can create habits, attitudes, dispositions that remind us of our commonality. And so that's part of any project of creating a more equal society, even before we get to the tax rates, which I agree with you are essential. We have to create public places and common spaces that bring people together from different walks of life, that cultivate a sense of mutual responsibility and belonging.

出典：Thomas Piketty and Michael J. Sandel, (2025) *Equality: What It Means and Why It Matters*, Polity Press. p 78-79 一部改変

Note：

affluent 裕福な

secede 離れる

municipal 自治体の

inadvertent 無意識な

mutual 相互の

設問 1 資料 1 および資料 2 で述べられている「体験格差」について、それが生じる要因と解消され難い理由はなにか、400 字以内で説明しなさい。

設問 2 資料 3 の「格差が拡大再生産」していくメカニズムと資料 4 の格差がもたらす課題を説明した上で、自身の考えを 600 字以内で述べなさい。